

首都圏外縁農山村地域における スポーツ合宿地域の成立システム

渡邊 瑛季*

抄録

本研究では、日本におけるスポーツツーリズムの代表的かつ伝統的な形態とされるスポーツ合宿を対象に、その大規模受け入れ地域が成立しうる条件を明らかにした。そのために、事例地域として長野県上田市の菅平高原を選定し、そこで夏季に盛んに行われるラグビー合宿の集中要因と合宿誘致に果たす人的ネットワークの役割の2点の分析を行った。

菅平高原へのラグビー合宿の集中要因は、スポーツ合宿を受け入れることができる宿泊施設が多数集積し、それら宿泊施設が占有的な利用が可能な芝グラウンドを所有していることである。これに加え、特定の時期に特定の年齢層の合宿が集中している。すなわち、高校生と大学生の夏季休業期間であり、なおかつラグビーのシーズンイン直前にあたる8月に合宿の実施時期が集中する。また、シーズンイン直前の時期に実戦に近い練習を行うため、他クラブとの試合を行うクラブが多数存在する。このような行動パターンで合宿を行うクラブは高校や大学のいわゆる強豪校が中心である。

新規の合宿客の誘致にあたっては、ゲストとホストを仲介するエージェントの属性によってそのパターンが異なる。主なエージェントとして、1) ゲストとホスト双方の事情を知る人物、2) 合宿のコーディネートを専門的に行う旅行会社が挙げられる。ラグビーの場合は、菅平高原に出入りするスポーツ用品メーカーの社員など前者の存在が合宿の誘致に寄与している。これらのエージェント以外にも、ゲストどうし、ホストどうしでも菅平高原で合宿を実施するために必要な情報を、それぞれの人的ネットワークを介して提供、獲得している。このように、菅平高原に利害関係のある者どうしが、菅平高原での合宿実施につなげるために、それぞれが持つ既存の人的ネットワークを駆使して合宿客を誘致していることが、菅平高原独特のシステムであるといえる。

キーワード：スポーツツーリズム，スポーツ合宿，ラグビー，人的ネットワーク，
長野県菅平高原

* 筑波大学大学院生命環境科学研究科博士後期課程 〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1

Continuous System of Sports Camp Region in Outer Edge of Tokyo Metropolitan Area

Eiki WATANABE *

Abstract

This study revealed a condition that can hold a large acceptance region for their sports camp, which are typical and traditional forms of sport tourism in Japan. For this, I selected the Sugadaira-kogen(heights) in Ueda city, Nagano prefecture as a study area, where take place lots of rugby training camps in Japan. Then, I analyzed two points, 1) the factors to concentrate rugby training camps to Sugadaira-kogen, 2) the role of the human network contributes to attract rugby training camps in Sugadaira-kogen.

Concentration factor of rugby training camp to Sugadaira-kogen is, integrated many accommodation that can accept sports camps and they have grounds covered with grass which can use exclusively for their guests. In addition to this, rugby training camps has been concentrated particular age in a specific period. In other words, high school and college students of rugby clubs concentrates to Sugadaira-kogen in August, which is summer holiday period and just before the regular season. In order to conduct the exercises assuming the game just before the regular season, many clubs make match games with other clubs. This behavior pattern is often taken places the clubs so-called powerhouse schools.

The patterns to attract new camp guests to Sugadaira-kogen are different to the agent that mediates the guest and host. The main agents are 1) the person who knows the situation both of guest and host, 2) travel agent that coordinates sports camps professionally. In the case of rugby, the presence of the former, such as employees of sporting goods manufacturers who manage their goods shop in Sugadaira-kogen only in summer contributes to attract new guests. In addition to these agents, not only the guest each other but also host each other provides the information necessary for implementing the training camp in Sugadaira-kogen, through their human network. In this way, persons who lives and relates to Sugadaira-kogen make full use of existing human networks to attract the new guests in order to conduct their training camp in Sugadaira-kogen. This is a unique attracting system of Sugadaira-kogen.

Key Words : sports tourism, sports camp, rugby, human network,
Sugadaira-kogen in Nagano

* Doctoral Program in Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Tennodai1-1-1, Tsukuba, Ibaraki, 305-8572, Japan

1. はじめに

近年、日本においてスポーツツーリズムが注目を浴びている。日本では、1990年代以降、行政がスポーツツーリズムを都市経営戦略やまちづくりのために積極的に推進するという動きがみられるようになった。具体的には観光庁による「スポーツ立国戦略」(2010年～)、地方自治体では、さいたま市の「さいたまスポーツコミッション」設立(2011年～)などが挙げられる。こうした事業は、スポーツを通じた地域振興や観光需要の創出を企図して行われていることが多く、スポーツを活用した集客力の向上やリピーターの増加が期待される。

こうした近年の動向とは対照的に、スポーツは高度経済成長期から観光の目的のひとつとして広く認知されてきたのも事実である。高度経済成長期の日本の農村の中には、スキー、海水浴、ゴルフなどのスポーツが重要な観光目的となって観光地域へと変貌した地域もある。特にスキー場や海水浴場を有する地域では、民宿と呼ばれる農家や漁家が経営する宿泊施設が増加し、宿泊機能を担うようになった。そして、設備投資を進めて規模拡大を図ってきた民宿では、季節営業であったものが、通年営業へと変化し、その中には農漁業を辞め、宿泊業に特化する世帯もあらわれた(呉羽, 2009)。

日本で最大の観光市場である首都圏の外縁部に位置する農村は、スキー場、温泉地、テニス場、海水浴場を目的とする観光地域として高度経済成長期以降、発展してきた。しかし、1990年代以降、団体旅行の縮小やスキー場の低迷が続いているため、北関東や信越地方の民宿は経営が停滞しているとされている(山村, 2006)。

このような既存の観光地域の低迷の中で、スポーツ合宿を受け入れたり、スポーツイベントを開催したりすることで、宿泊需要を維持している地域が首都圏外縁部に存在する。そうした地域の実態の報告は、地理学、観光学、体育学において散見される。

日本における参加型スポーツツーリズムの代表的形態とされる(木村, 2009)スポーツ合宿を分析対象とした研究は、観光地理学とスポーツ産業論の分野でなされてきている。観光地理学では「ホスト」と呼ばれる地域の変容過程や宿泊施設の経営特性に関する分析が多く、研究蓄積がある(例えば、新藤ほか, 2003; 井口ほか, 2006など)。これに対し、スポーツ産業論では研究例は少ないものの、「ゲスト」と呼ばれるスポーツ合宿を行う者やスポーツ合宿を観戦する観光者の行動特性について言及した研究がみられる(例えば、押見ほか, 2012)。観光学においてはスポーツツーリズム専門の学術雑誌

を含め、欧米での研究が先行している。

観光地理学におけるホストを対象とした研究においては、農家や漁家が、季節営業の民宿を開業し、スポーツ合宿客を夏季に徐々に受け入れ始め、自身が所有する田畑をグラウンドやテニスコートに転換していき、合宿需要の増加とともに通年営業化し、宿泊業に特化するというプロセスや、それに関連する経営者の経営行動、宿泊施設への設備投資状況などが明らかになっている。しかし、そこを訪問するゲストの実態については、詳細には触れられておらず、特になぜその地域を合宿地として選定し、訪問しているのかといった来訪要因の分析が不足している。

一般に、観光を対象とした研究ではゲストを特定することが困難とされているが、スポーツ合宿では、ゲストを特定することができるため、それが克服可能であると考えられる。また、ゲストの来訪要因を明らかにすることは、スポーツツーリズムにおけるスポーツを活用した集客力の向上やリピーターの増加にも寄与すると考えられる。

スポーツ合宿を行うゲストの来訪要因を分析した研究は若干存在する。押見ほか(2012)は、新潟県内で合宿を行った高校と大学の運動部12団体に対し、インタビュー調査を行った。その結果、合宿場所を決める意思決定プロセスを①エージェント型、②学校エージェント型、③出身地型、④口コミ型の4つに分類した。スポーツ合宿が受け入れ可能な宿泊施設とスポーツ施設には何らかのつながりが必要であるとした上で、エージェントとされる旅行会社を通さないで予約する団体は、知人や何らかのつながり(association)を通して合宿地を決定していたため、スポーツ合宿地選考にあたっては、何らかのエージェントが深く関与していたとした。

また、エリートと称される高いレベルのアスリートの合宿地決定にあたっては、施設面とトレーニングに対する価値観の違いが大きな要因となるとされる。Maier and Weber(1993)は、高地トレーニング施設の有無などパフォーマンスの発揮ができることやそのための施設があることを重視して合宿地を選定しているとし、その際にスポーツマネージャーやニッチ市場をターゲットとしたパッケージを情報源としているとした。特に高いレベルのアスリートやプロのスポーツ組織は、異なるトレーニング施設や目的地を求めるとされる(Higham and Hinch, 2009)。また、チームの文化(Morgan, 2007)、トレーニングと観光に割く時間のバランス(Hodge et al., 2009)といったゲストが有するトレーニングに対する価値観の違いも合宿地選定に関係すると指摘されている。

2. 目的

本研究では、日本におけるスポーツツーリズムの代表的かつ伝統的な形態であるスポーツ合宿を対象に、スポーツ合宿の大規模受け入れ地域が成立しうる条件を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

3-1. 研究方法

日本におけるスポーツ合宿の大規模受け入れ地域として長野県上田市菅平高原を選定し、そこで広く展開されているラグビー合宿が成立しうる条件を、菅平高原へのラグビー合宿の集中要因と合宿誘致に果たす人的ネットワークの役割の2点から明らかにする。

3-2. 調査方法

研究対象の特性上、主に研究対象地域での聞き取りや資料収集による調査方法を用いた。

菅平高原観光協会、菅平高原旅館組合に対して菅平高原を取り巻く観光の現状および合宿の受入状況について聞き取り調査を実施し、菅平高原におけるスポーツ合宿の特徴を概括的に把握する。その後、宿泊施設の経営者に対して、宿泊施設の経営形態、合宿客の誘致方法、個別の合宿客の実態について聞き取り調査を実施する。これにより、菅平高原へのラグビー合宿の集中要因と合宿誘致に果たす人的ネットワークの構造を詳細に明らかにする。なお、菅平高原には宿泊施設が2014年現在96軒存在し、そのうち90軒が家族経営による民間の宿泊施設である。本研究では、この90軒のうち、協力が得られた10軒から聞き取りを行った。聞き取り方式は

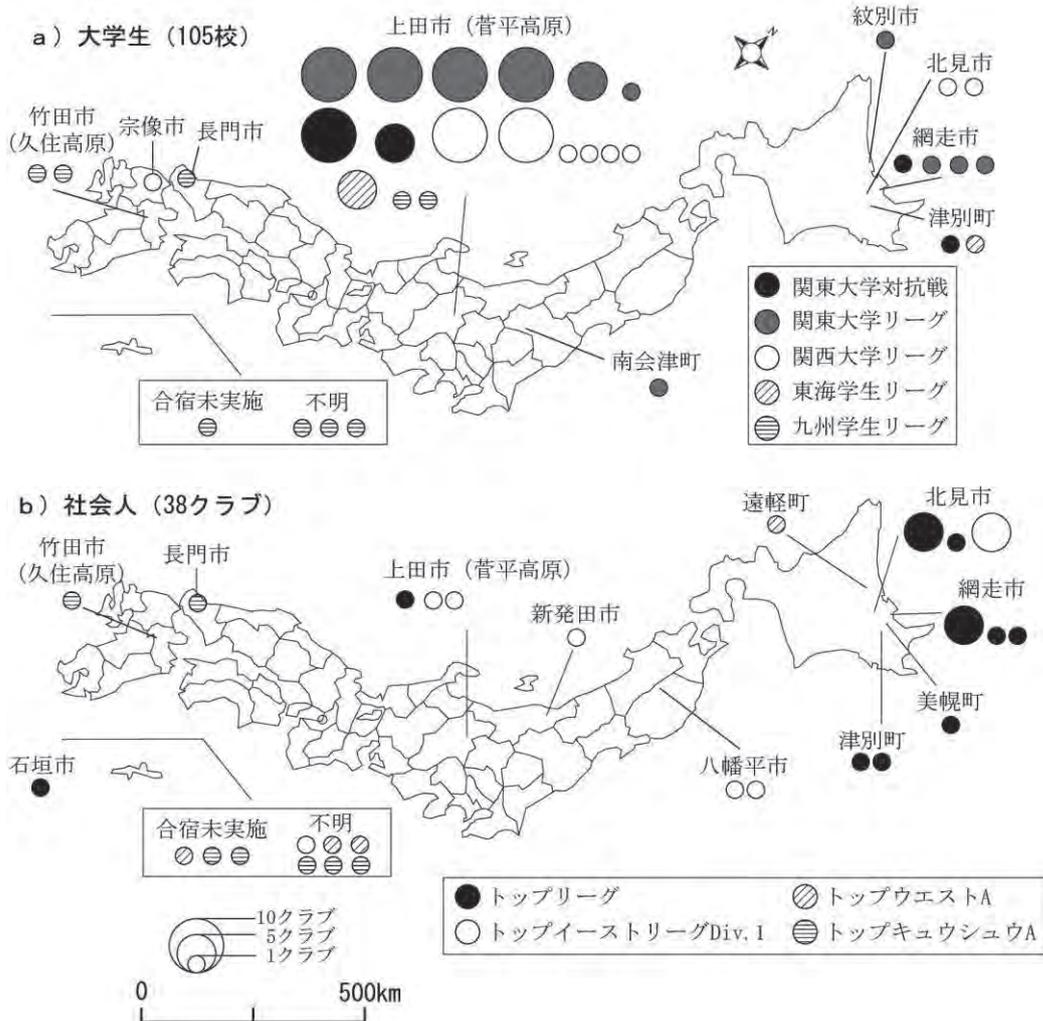


図1 所属リーグ別の大学生・社会人ラグビークラブの夏季合宿地分布 (2014年)

注) 大学生の分析対象としたクラブは、関東大学対抗戦がA・B、関東大学リーグ戦が1～6部、関西大学リーグがA～Cリーグ、東海学生リーグがA1リーグ、九州学生リーグが1部である。

(菅平高原観光協会提供資料、各大学ラグビー部公式ウェブサイト、各市町村公式ウェブサイトにより作成)

直接対面で、回答時間は1軒あたり30分～3時間であった。これら10軒の宿泊施設は、いずれも高校、大学、社会人の強豪ラグビーチームを受け入れた実績を有している。

また、グラウンドや宿泊施設の分布を把握するため、土地利用調査を2014年9月に実施した。

現地調査は2014年5～11月にかけて実施した。

4. 結果及び考察

4-1. ラグビー合宿の現状とその受入地域

1) 日本におけるラグビー合宿の分布

図1は、日本における大学生と社会人のラグビークラブが2014年合宿を行った場所を示したものである。分析対象とした大学生クラブは105校でいずれも大学の部活動、社会人クラブは38クラブでいずれも実業団であった。

市町村別に集計すると、大学生については長野県上田市が92校、北海道網走市が4校、北海道北見市と津別町および大分県竹田市が各2校、北海道紋別市、福島県南会津町、山口県長門市、福岡県宗像市が各1校であった。約9割の大学が長野県上田市を選択しており、そのうち関東地方に所在する大学が61校にも及ぶ。関東地方のみならず関西、東海、九州からも来訪があり、全国の大学が上田市を合宿地として選択していることがうかがえる。また、北海道のオホーツク海側の地域にも若干の集中が認められる。

一方、社会人については北海道北見市が21クラブ、北海道網走市12クラブ、長野県上田市が3クラブ、北海道津別町と岩手県八幡平市で各2クラブ、北海道美幌町・遠軽町、新潟県新発田市、山口県長門市、大分県竹田市、沖縄県石垣市で各1クラブであった。社会人クラブは大学生とは異なり、北海道のオホーツク海側の地域を合宿地として選定している傾向が強いことが示唆される。

全体として、長野県上田市菅平高原では大学生、北海道北見市や網走市では社会人が合宿を行っており、両者とも夏季でも冷涼である特定の地域に合宿地が集積する傾向にあるといえる。

2) 菅平高原におけるスポーツ合宿対応の宿泊施設の発達

文献に登場する日本における最初のスポーツ合宿は、1931(昭和6)年に、長野県菅平高原において法政大学ラグビー部が始めたものである(新藤ほか, 2003; Kureha *et al.*, 2003)。これは、菅平高原の夏季の冷涼な気候に加え、人脈があったことによるものである(Kureha *et al.* 2003)。

菅平高原では、各大学のラグビー部の合宿を受け入れるようになるが、第二次世界大戦の影響で1951年に各大学のラグビークラブが菅平に戻ってくるまで一時停滞した。

高度経済成長期になると、大量観光の進展とともにスキー観光者やスポーツ合宿者を受け入れるようになった民宿が首都圏外縁部の農山村を中心に出現した。1970年代以降、夏季の農業と冬季のスキー民宿経営を組み合わせた複合経営を行っていた首都圏外縁農山村の農家は、民宿営業の通年化を目指そうと、夏季に大学生のスポーツ合宿者を誘致することを企図した。菅平高原においては、夏季の観光業発展のために畑を中心とする農業的土地利用がグラウンドやテニスコートなどのスポーツ施設へと転換されたことが山本ほか(1981)による指摘されている。菅平高原では1967年にラグビー日本代表の合宿を受け入れて以降、合宿を行うラグビークラブが急増した。このため、1970年代後半には、同志社大学や明治大学などの大学のラグビークラブが、混雑する菅平高原を避け、北海道などの他地域に合宿地を変更した。しかし、1980年代後半には練習相手の多さや大都市圏に近いという恵まれた立地環境が再評価され、合宿チーム数は再び増加に転じたとされている(新藤ほか, 2003)。

1990年頃のバブル経済崩壊後、大量観光に依存する日本の多くの宿泊施設が廃業に追い込まれる中、スポーツ合宿を受け入れる民宿でも来訪者の減少が見られ始めた。これに対応するため、全国各地の民宿では更なる合宿需要の開拓を目指し、スポーツ施設の多様化や高級化、収容定員の増加、受入スポーツ種目の増加、スポーツ大会の誘致など多様な策をとるようになった。

菅平高原では、1991年にJリーグが創設されたこともあって、翌年からサッカー合宿の本格的な受け入れが開始された。また、菅平高原では1999年には「菅平高原スポーツランド サニアパーク菅平」という総面積18.5ha、芝グラウンド5面、陸上競技場、マレットゴルフ場を備えた施設が整備された。これにより、質の高い練習や試合の環境を求めるスポーツ合宿チームが増加したほか、陸上競技合宿者の獲得やラグビーやサッカーなどの複数の大会の誘致が行われた(新藤ほか, 2003)。

図2は、1990年以降の菅平高原への来訪者の推移を示したものである。1990年代前半までは、夏季と冬季の来訪者数は拮抗していたが、1990年代後半以降、スキー観光の低迷や先述の夏季の合宿需要の増加があり、夏季の来訪者の人数、割

合とも増加し、2013年時点では約5割が夏季の来訪者となっている。夏季の菅平高原への来訪者は、スポーツ合宿客がメインで、このほか、登山者やスポーツ合宿中に実施される練習試合の観戦者が含まれる。

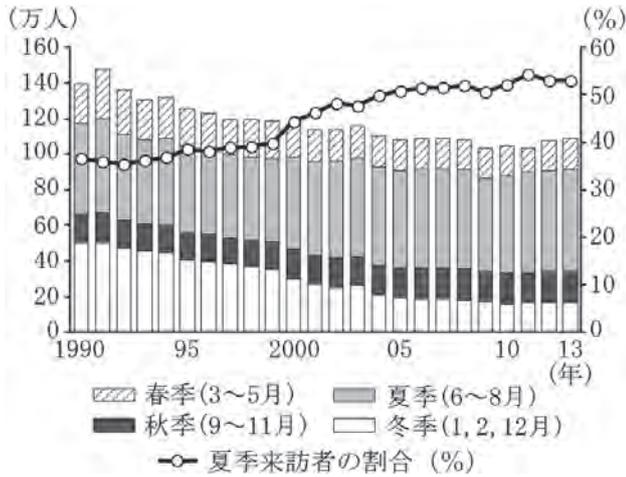


図2 菅平高原における季節別の観光地利用者数と夏季に占める割合の推移 (1990～2013年)

注) 延べ人数を示す。

(菅平高原観光協会提供資料、長野県観光地利用者統計調査結果により作成)

4-2. 菅平高原へのラグビー合宿の集中

1) ラグビー合宿集中の背景

菅平高原では、ラグビー、サッカー、アメリカンフットボール、陸上競技、テニスなど様々なスポーツの合宿が実施されている。2013年度の時点でこの中でも最も多いのはラグビーで797チーム、次いでサッカーが247チームとなっている。図3は、菅平高原における夏季のラグビー合宿の受入クラブ数の推移を示したものである。1994年以降は約800クラブで一定に推移し、安定的に需要を確保できているといえる。統計が存在する1989～1994年までは大学生と高校生の割合が拮抗していたが、徐々に大学生の割合が低下し、2013年には合宿客の約5割を高校生が占めており、大学生が約2割にとどまっている。こうした菅平高原へのラグビー合宿集中の背景として、グラウンドと合宿に対応した宿泊施設が多数集積していることが指摘できる。図4は、菅平高原における宿泊施設とスポーツ施設の分布を示したものである。2014年9月の時点で、宿泊施設が96軒(うちグラウンド所有46軒、グラウンド非所有44軒、学校寮6軒)、グラウンドが120面(人工芝17面、天然芝109面、土4面)存在する。

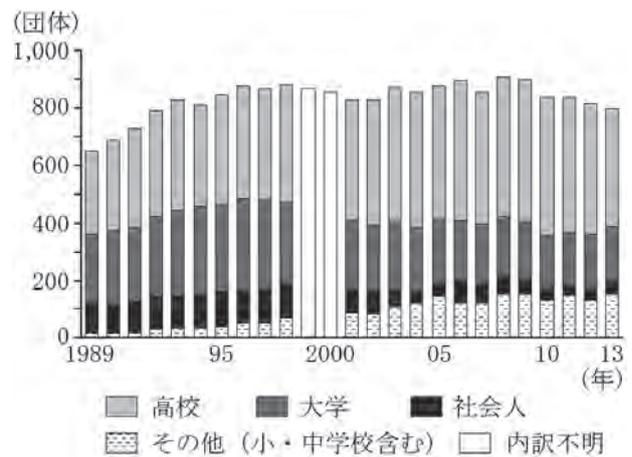


図3 菅平高原における夏季のラグビー合宿受入クラブ数の推移 (1989～2013年)

(菅平高原観光協会提供資料、安藤(1999)により作成)

多数のグラウンドの集積は、ラグビーやサッカーといったグラウンドを必要とする種目にとって、占有的な利用ができ大きな魅力である。また、実戦で使用されることもあり、練習しやすいという天然芝のグラウンドが100面以上存在することで、多数のクラブの同時期の合宿を可能にしている。これに加え、人工芝のグラウンドも近年増加している。人工芝の設置コストは数千万円にもなるというが、雨天時にも練習が可能であり、また天然芝と異なり毎年張り替える手間が少ないなどメンテナンスが比較的容易である。しかし、社会人クラブほど人工芝は練習で利用することは少ないという。多数のグラウンドが集積している地域は首都圏では山梨県山中湖村、茨城県神栖市など限られており、このことも菅平高原の合宿地としての優位性を高めている。

2) 練習試合の実施による日程の固定化

約800クラブにも達するラグビー合宿で頻繁に行われているのが練習試合である。ラグビーの合宿は8月第2週から本格化し、8月末まで行われる。この期間は菅平高原での合宿を希望する団体が絶えず、宿泊施設の空室を探すのが困難ともいわれているほどである。菅平高原には全国でもいわゆる強豪とされる実力のあるクラブが来訪している。そのようなクラブと練習試合を実施することで、自らのクラブの実力を確認することができる。ラグビーのシーズンは秋以降であり、社会人は8月下旬から、大学生は9月からそれぞれリーグ戦が始まり、高校生は秋には全国大会へ向けた予選が開始される。そのため、シーズン開幕直前である8月は、シーズンへ向けての最後の仕上げの段階である。そのため、チームの仕上がり

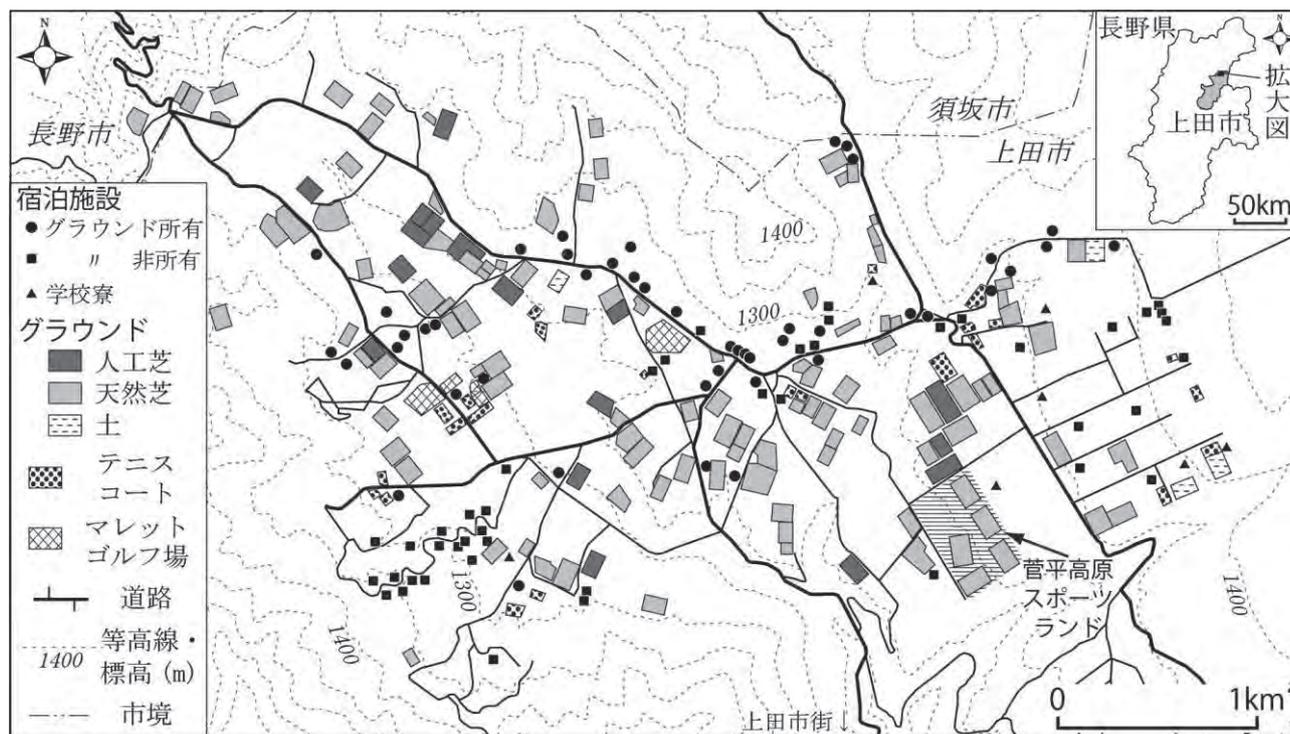


図4 菅平高原における宿泊施設・スポーツ施設の分布 (2014年9月)

(現地調査、菅平高原観光協会提供資料により作成)

具合を確認する意味でも練習試合が行われる。すなわち、強豪校の合宿が集中している菅平高原に8月中に来訪することで、シーズン中は戦うことができない所属リーグや所属地区以外の全国の強豪校との試合が行えるのである。

表1は、全国高等学校体育連盟による高校所属別に、菅平高原スポーツランドで行われた試合の組合せ数を示したものである。関東勢対近畿勢が16試合で最も多く、次いで関東勢どうしが11試合となっている。関東勢どうしを除けば、ほとんどが所属地区以外のチームと試合を組んでおり、中には東北勢対九州勢など遠方の地区の高校と試合をしているケースもみられる。

このように、全国の強豪校が菅平高原で普段対戦できない相手と試合を行うことや、夏季休業の時期との兼ね合いもあって高校生については8月中旬という特定の時期に合宿が集中する状況が発生している。

4-3. 菅平高原へのラグビー合宿の受入特性

1) 宿泊施設における夏季の合宿受入状況

8月に集中するラグビーの合宿をホストはどのようにして受け入れているのであろうか。菅平高原にある宿泊施設B館の事例をみていく。既存の天然芝のグラウンド1面のほか、2014年に畑を人工芝のグラウンド1面に転換した。民宿として1950年代に開業し、1991年から合宿を本格的

表1 菅平高原スポーツランドでの高校ラグビー試合の所属地区別実施回数 (2014年7~8月)

| | 北海道 | 東北 | 関東 | 北信越 | 東海 | 近畿 | 中国 | 四国 | 九州 |
|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| 九州 | | 2 | 3 | 1 | 1 | 6 | | | |
| 四国 | | | | | | | | | |
| 中国 | | 1 | 2 | 1 | | 3 | | | |
| 近畿 | | 6 | 16 | 2 | 4 | 1 | | | |
| 東海 | | | 5 | 1 | | | | | |
| 北信越 | | 2 | 1 | | | | | | |
| 関東 | | 2 | 11 | | | | | | |
| 東北 | | 1 | | | | | | | |
| 北海道 | | | | | | | | | |

注1) 地区は、全国高等学校体育連盟ラグビー専門部による。

注2) 空欄は0回であることを示す。

(菅平高原スポーツランド提供資料により作成)

に受け入れ始めた。図5は、B館の2014年7~8月の合宿受入状況を示したものである。7月下旬に高校生のサッカーの合宿が3校あり、8月にはラグビー合宿の高校生3校と大学生1校を受け入れている。サッカーの高校3校と中学生の地域クラブはいずれも合宿を専門的に扱う菅平高原外の旅行会社によって誘客されたものである。一方、ラグビーの4校については、X高校とS大学が知人であるスポーツ用品メーカーの社員と

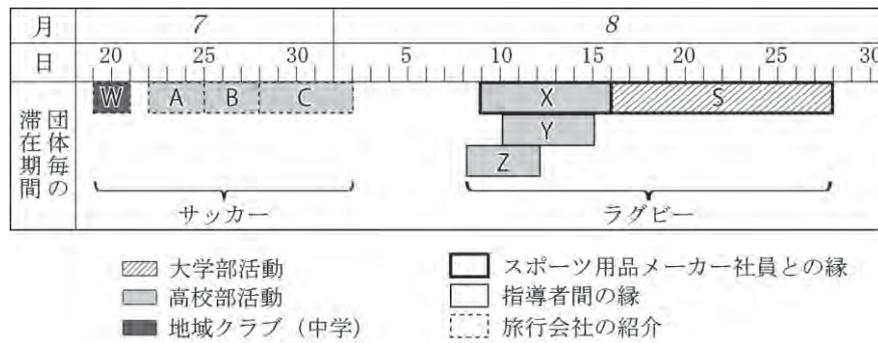


図5 宿泊施設 B 館の夏季における合宿受入状況 (2014 年)

注1) サッカー、ラグビー以外の合宿の受入状況は不明。
 注2) 図中のアルファベットは図6に対応する。

(聞き取りにより作成)

の縁で、また Y 高校と Z 高校は X 高校の指導者が勧誘したことにより、B 館で合宿を行うようになった。

スポーツ用品メーカーの社員である Q さんは、夏季のみ菅平高原に出店するスポーツ用品メーカーの営業部長であり、X 高校の指導者は Q さんと知り合いであった。九州の強豪校である X 高校は、菅平高原で合宿を行っていたが、宿泊していた施設は、グラウンドを所有していなかった。そのため、グラウンドを所有する宿泊施設を探していた。一方、Q さんは B 館の空室状況を知っていた。そこで、X 高校の指導者と B 館の経営者の双方と知り合いであった Q さんは、仲介という立場で双方をマッチングさせ、X 高校は B 館で合宿を行うようになったのである。

さらに、X 高校の指導者は、関東地方の Y 高校と、東北地方の Z 高校の指導者と知り合いであり、3 校合同で合宿を B 館で実施したいと B 館の経営者に申し出たことで、B 館に Y 高校と Z 高校が新規に来訪することになったのである。

このように、スポーツ用品メーカー社員のほか、菅平高原観光協会のようなゲストとホストを知る何らかの第三者あるいはホストどうし、ゲストどうしの知人のネットワークを利用することで、旅行会社など菅平高原外の企業を介さず、地域内で誘客ができる人的ネットワークが存在することが菅平高原における誘客の大きな特徴である。

2) 人的ネットワークの特徴と情報の質

図6は、宿泊施設 B 館における誘客に必要な情報の質およびフローからみた誘客パターンをラグビーとサッカーとにわけて示したものである。

ラグビーにおいては、Q さんというゲスト (X 高校) とホスト (B 館) を知るエージェントを介して B 館で合宿するための情報交換が行われた。

この情報は、X 高校、B 館双方にとって非常に具体的なものであった。すなわち、X 高校が希望する日程で全員が宿泊できるか、グラウンドは借りることができるかといった要求を、X 高校は Q さんを介して B 館に行うことができた。ここでやり取りされる情報は、B 館に空室があるという具体的かつゲストとホスト双方が対面接触を必要とする質の高い情報であったため、X 高校は B 館で合宿を行えるようになったといえよう。また、空室の存在という有益な情報を Q さんという菅平高原内に長期滞在している人物を介して X 高校に伝えられたことで、他地域への合宿地の変更に

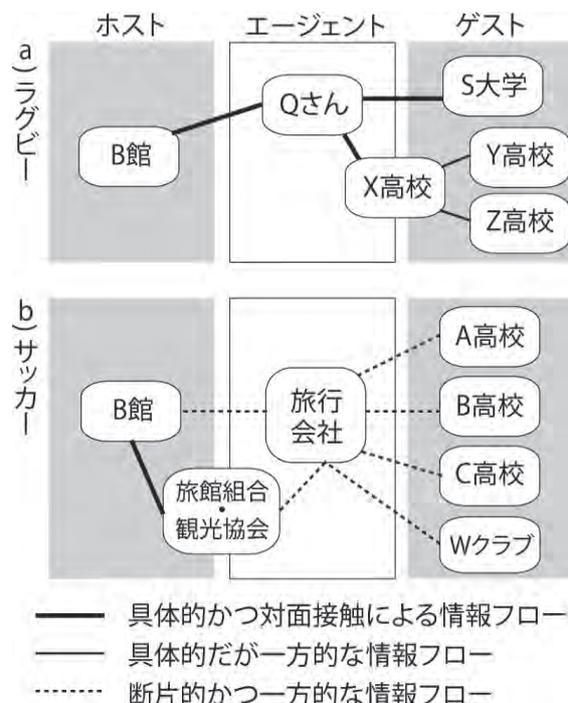


図6 情報の質およびフローからみた宿泊施設 B 館への誘客パターン

(聞き取りをもとに作成)

つながる可能性も少なかったといえる。

さらに、X高校の指導者は知人であるY高校とZ高校という高校所在地が大きく異なるクラブの指導者に対して、B館での合宿に必要な情報を具体的に伝えることができた。

一方で、サッカーにおいてはラグビーとは対照的に旅行会社や菅平高原観光協会を介して誘客されることが多いため、ゲストもホストもお互いの実態を把握する情報が少ない状況である。旅行会社がゲストやホストに提示するお互いの情報は、Qさんのような知人を介したものに比べ、断片的であるなど質が低下し、旅行会社から一方的に伝えられるものであると考えられる。

5. まとめ

本研究では、長野県菅平高原におけるラグビー合宿を対象に、スポーツ合宿の大規模受け入れ地域が成立しうる条件を、菅平高原へのラグビー合宿の集中要因と合宿誘致に果たす人的ネットワークの役割の2点から明らかにした。

菅平高原へのラグビー合宿の集中要因は、占有的な利用が可能なグラウンドと合宿に対応した宿泊施設が多数集積している点大きい。これに加え、8月というシーズンイン直前に合宿が行われることで、練習試合を行いたいクラブが多数存在するため、特定の時期に特定の年齢層の合宿が集中する。このような形態で合宿を行うクラブは高校や大学のいわゆる強豪校が中心である。

新規の合宿客の受け入れパターンは、エージェントの属性によって大きく異なる。ラグビーの場合、宿泊施設の空室状況などを把握する人物が菅平高原内に存在し、エージェントとしてゲストとホストを仲介する。また、ゲストどうし、ホストどうしも菅平高原で合宿を実施するために必要な情報を、それぞれの人的ネットワークを利用して提供、獲得している。このように、菅平高原に利害関係のある者どうしが、菅平高原での合宿実施を促進するために、各々が持つ既存の人的ネットワークを駆使して合宿客を誘致していることが、ラグビー合宿の大規模受け入れ地域である菅平高原ならではのシステムであるといえる。

参考文献

安藤 裕監修 1999. 『菅平高原スキー場開設 70周年記念誌』. 菅平高原観光協会発行, 223p.
井口 梓・小島大輔・中村裕子・星 政臣・金 玉実・渡邊敬逸・田林 明・トム=ワルデチュク 2006. 九十九里浜における観光の地域的特性—白子町中里地区のテニス民宿を事例に—。地

域研究年報 **28** : 127-166.

- 押見大地・原田宗彦・佐藤晋太郎・石井十郎 2012. スポーツチームの合宿地選考における意思決定プロセスの検討：高校・大学スポーツチームに着目して。スポーツ産業学研究 **22**(1) : 9-27.
木村和彦 2009. スポーツ・ヘルスツーリズムの対象と事例. 原田宗彦・木村和彦編. 『スポーツ・ヘルスツーリズム』. 大修館書店, 47-62.
呉羽正昭 2009. 観光業—首都圏の観光・レクリエーション地域—。斎藤 功・石井英也・岩田修二編『日本の地誌6 首都圏II』. 朝倉書店, 114-129.
新藤多恵子・内川 啓・山田 亨・呉羽正昭 2003. 菅平高原における観光形態と土地利用の変容. 地域調査報告 **25** : 19-45.
山村順次 2006. 多様な観光地域社会づくり. 山村順次編. 『観光地域社会の構築—日本と世界—』. 同文館出版, 1-23.
山本正三・石井英也・田林 明・手塚 章 1981. 中央高地における集落発展の一類型—長野県菅平高原の例—. 人文地理学研究, **5** : 79-138.
Higham, J.E.S. and Hinch, T.D. 2009. *Sport and Tourism: Globalization, Mobility and Identity*. Oxford: Elsevier Butterworth-Heinemann.
Hodge, K., Lonsdale, C. and Oliver, A. 2009. The elite athlete as a 'Business traveler/tourist'. In Higham, J.E.S. and Hinch, T.D. (eds) 2009. *Sport and Tourism: Globalization, Mobility and Identity*. Oxford: Elsevier, 88-91.
Kureha, M., Uchikawa, H., Shinto, T. 2003. Development of summer tourism for training camps in Sugadaira-Kogen as a winter resort. *Ann. Rep. Inst. Geosci. Univ. Tsukuba*, **29**:5-10.
Maier, J. and Weber, W. 1993. Sport tourism in local and regional planning. *Tourism Recreation Research* **18**(2): 33-43.
Morgen, M. 2007. 'We're not the Barmy Army!': Reflections on the sport tourist experience. *International Journal of Tourism Research* **9**: 361-372.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。